

法華経「常不輕菩薩品」の読み方

—常被軽か常不軽か—

定方 晟

法華経の「常不輕菩薩品」はその主人公の名の特異さによって知られている。「常不輕」は「いつも軽侮しない」を意味し、その名の由来は、この名の菩薩がいつも「わたしはあなた方を軽侮しません」といつていたことにあるとされている。

この名の原名（サンスクリット語）はサダーパリブータ（Sadāparibhūta）であり、これを「常不輕」と訳したのは羅什である。羅什に先立つ訳者・竺法護は「常被輕慢」、すなわち「いつも軽侮されている男」と訳した。「常被輕慢」と「常不輕」とでは、「被」と「不」の違いで、軽侮の対象が逆になる。

これほどよく知られた名にこんな矛盾があってよいのだろうか。この問題についてはすでに多くの論考があるが、わたしもその驥尾に付して考察を試みよう。

まず問題の章（=品）を訳してみよう。経典には如来の十号が繰り返されるが、拙訳では簡略化して「如来」の一号だけを残す。「菩薩摩訶薩」も「菩薩」にする。その他にも適宜、簡略化をおこなう。主旨の伝達を優先させるためである。この章は前半が散文、後半が韻文であるが、内容は同じなので、後半を省略する。のちの解説のために、文節に番号を付す。

- (1) さて世尊はマハースターマプラープタ菩薩に話しかけた。
- (2) このような次第であるから、マハースターマプラープタよ、この法門を拒否する者たち、この経典を受持する比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を罵り、侮辱し、不当な粗い言葉を浴びせる者たちには、言葉に表わせないような望ましくない結果が生じると知らねばならない。一方、この経典を受持し、口誦し、教示し、考究し、他の人々に詳しく解説する者たちには、先にわたしが述べたような望ましい結果が生じよう。かれらはまた先に述べたような眼耳鼻舌身意の浄化を達成するであろう。
- (3) むかし、マハースターマプラープタよ、無量無辺の数よりもさらに多くの数の劫を遡るむかし、ビーシュマガルジタスヴァララージャという如来が現われた。そのときの劫の名はヴィニルボーガといい、世界の名はマハーサンバヴァーといった。

- (4) 世尊ビーシュマガルジタスヴァララージャは、マハースターマプラープタよ、神と人間と阿修羅を含む世界に向って法を説いた。声聞には四聖諦に連なる法、すなわち生・老・病・死・愁・悲・苦・憂・悩を克服するための涅槃に導く縁起の考察法を説いた。菩薩には六波羅蜜に連なる無上正等覚を始め、仏知の照見に到達する法などを説いた。
- (5) この如来の寿命は、マハースターマプラープタよ、四十のガンジス河の砂粒の数の百千億ナユタ倍¹⁾の劫であった。この如来が入滅したのち、ジャンプ洲の微塵の数(=ジャンプ洲を粉碎してできる微塵の数)の百千億ナユタ倍の劫のあいだ、正法は存続した。さらに四洲の微塵の数(=四洲を粉碎してできる微塵の数)の百千億ナユタ倍の劫のあいだ、像法が存続した。
- (6) マハーサンバヴァー世界で、マハースターマプラープタよ、ビーシュマガルジタスヴァララージャが入滅し、しかも像法が消滅したとき、同じ名の別の如来が現われた。そのあとにも次々と同じ名の如来が二十百千億ナユタ現われた。その中でビーシュマガルジタスヴァララージャの名をもつ最後の²⁾如来が入滅し、正法が消滅し、像法が消滅しはじめ、増上慢の比丘たちがかれの教えを攻撃したとき、サダーパリブータという名の菩薩比丘 (*bodhisattvo bhikṣur*) が現われた。
- (7) いかなる理由で、マハースターマプラープタよ、この菩薩はサダーパリブータと呼ばれたか。この菩薩は誰かれとなく人を見かけると、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を問わず、近づいて、こういったのである。
- (8) 尊者たちよ、わたしはあなた方を軽侮しません (*na paribhavāmi*)。あなた方は軽侮されません (*aparibhūtā*)。なぜかといえば、尊者たちよ、みなさん菩薩行をおこなってください、(そうすることにより)あなた方は如来・阿羅漢・正等覚になるからです。
- (9) このようなやり方で、マハースターマプラープタよ、この菩薩比丘は説法や読誦はせず、誰かを遠くからでも見かけると、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を問わず、かれに近づいて、こういったのである。
- (10) 大姉たちよ、わたしはあなた方を軽侮しません。あなた方は軽侮されません。なぜかといえば、みなさん、菩薩行をおこなってください、(そうすることにより)あなた方は如来・阿羅漢・正等覚になるからです。
- (11) そのとき、マハースターマプラープタよ、この菩薩からそのようにいわれたあらかたの比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷たちは立腹し、苛立ち、かれに悪意を抱き、罵り、侮辱した (*paribhāṣante*)。

- (12) なぜこの比丘は頼まれもしないのに「軽侮の心をもたない」などとわれわれにいうのか。無上正等覚が得られるなどと、いい加減な、われわれが望みもしない予言をわれわれにすることは、自分自身を軽侮されるもの (paribhūta) にすることだ。
- (13) そして、マハースターマプラープタよ、この菩薩は罵られ、侮辱されながら (paribhāṣyamāṇa) 何年も過したが、誰に対しても怒ることなく、悪意をもつことがなかった。人々はかれがいう言葉を聞いて泥や棒を投げつけたが、かれは遠くからかれらに向って大声で「わたしはあなた方を軽侮しません」と叫ぶのだった。いつもこんな言葉を聞かされつづけた増上慢の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷たちは、かれに「サダーパリブータ」(「いつも軽侮されている男」という名をつけたのである。
- (14) このサダーパリブータ菩薩は、マハースターマプラープタよ、死期を迎え、死に臨んだとき、妙法蓮華経という法門が説かれるのを耳にした。それはビーシュマガルジタスヴァララージャ如来によって二十百千億ナユタの詩頌でもって説かれた法門であった。サダーパリブータ菩薩は死の床で、空中からこの法門を(讃える)³⁾ 声を聞いた。かれはその何者とも知れぬ存在が空中から発した言葉を聞いて、この法門を奉持し、先に述べたような眼耳鼻舌身意の清浄性を獲得した。こうして獲得された清浄性のゆえに、かれは新たに二十百千億ナユタ年の寿命を得て、それ以後、この妙法蓮華経なる法門を説きつづけた。かの増上慢の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷たち、「わたしはあなた方を軽侮しません」といわれた人たち、かれに「サダーパリブータ」というあだ名をつけた人たちは、かれの優れた神通の力と、弁舌の力と、知恵の力とを知って、法を聞くためにかれに従う者となった。かれは他の百千億ナユタという多くの生類をも無上正等覚に導いた。
- (15) この菩薩は、マハースターマプラープタよ、かの世界から(他の世界に) 転生し、二十百億人のチャンドラスヴァララージャという名の如来を喜ばせつつ、かれらすべてのもとで妙法蓮華経を説いた(=妙法蓮華経を説いて喜ばせた)。かれはやがてこの功德のゆえにドゥンドゥビスヴァララージャという名の二十百千億ナユタの如来を順次に喜ばせつつ、かれらすべてのもとで妙法蓮華経を称え、四衆のために説くことになった。かれはさらにこの功德によりメーガスヴァララージャという名の二十百千億ナユタの如来を順次に喜ばせつつ、かれらすべてのもとで妙法蓮華経を称え、四衆のために説くことになった。かれはこれらすべての如来のもとで眼耳鼻舌身意の清浄を得るもの

となった。

- (16) サダーパリブータ菩薩は、マハースターマプラープタよ、百千億ナユタというこのように多くの如来を敬い、供養し、礼賛し、さらに他の百千億ナユタの如来を敬い、供養し、礼賛し、かれらすべてのもとで妙法蓮華経（を説いて）喜ばせた。こうした前世の功德が熟して、かれはついに無上正等覚を得るにいたった。
- (17) 汝は、マハースターマプラープタよ、疑問を抱いているであろう、いったいそのときのサダーパリブータとは何者なのか、ビーシュマガルジタスヴァララージャ如来の説法時に四衆から「常に軽侮されるもの」と見なされ、その後あれほど多くの如来を喜ばせたこの菩薩は、と。マハースターマプラープタよ、思い違いしてはならない。わたしこそそのときサダーパリブータという菩薩だったのである。もしわたしがそのときこの法門を受持し、護持しなかったら、わたしはこんなに早く無上正等覚を得ることはなかったろう。わたしは前世の如来たちのもとでこの法門を受持し、読誦し、説示したために、こんなに早く無上正等覚を得たのである。
- (18) かのサダーパリブータ菩薩が、マハースターマプラープタよ、かの世尊の説法時に、数百の比丘、数百の比丘尼、数百の優婆塞、数百の優婆夷にこの法門を聞かせ、「わたしはあなた方を軽侮しません。みなさん菩薩行をおこなってください、（そうすることにより）あなた方は如来・阿羅漢・正等覚になるからです」といったときに、この菩薩に対し悪意を起こした者たちは、二十百千億ナユタもの劫のあいだ如来に出会うことができず、法という言葉も、僧伽という言葉も、耳にすることができず、百千もの劫のあいだ阿鼻大地獄で激しい苦しみを味わったのである。しかし、かれらは（いまや）すべてこの業の束縛から解放されて、かの菩薩のおかげで無上正等覚に向って成熟させられたのである。
- (19) 汝は、マハースターマプラープタよ、疑問を抱いていることであろう、いったいそのときかの菩薩を罵り、軽蔑したものたちは何者なのか、と。かれらはいまこの集会にいるバドラパーラ以下五百人の菩薩であり、シンハチャンドラー以下五百人の比丘尼であり、スガタチェータナー以下五百人の優婆夷である。かれらはみな無上正等覚において不退転の境地を得たのである。このようにこの偉大な利益をもつ法門を受持し、読誦し、説示することは、菩薩たちが無上正等覚を得る資糧となるのである。
- (20) だから、マハースターマプラープタよ、如来が入滅したあとでは、菩

薩たちはこの法門を受持し、語り、説示し、宣伝すべきなのである。

サダーパリブータの原語 **sadāparibhūta** は合成語であり、その分解の仕方には二つのケースが考えられる。**sadā + paribhūta** と **sadā + aparibhūta** である。サンスクリット語では連声法によって **ā+a → ā** となるので、両ケースとも合成語は **sadāparibhūta** となるのである。**sadā** は「いつも」を意味し、**paribhūta** は「軽侮された」を、**aparibhūta** は「軽侮されない」(a は否定辞)を意味するから、語源をいかに解釈するか、語をいかに分解するかによって、「被軽」あるいは「不軽」の訳が導かれるのである。

paribhūta も **aparibhūta** も過去受動分詞である。だから文法的には「被軽」のほうがよい。「不軽」は a には対応するが、受動形には対応しない。⁴⁾

それにもかかわらず、「常不軽」説が有力なのは、それが羅什の訳語であること、名前として面白いことが理由であろう。⁵⁾

羅什訳の難点を解決しようと、学者はいくつかの解釈を提示している。その中には次のようなものがある。(a) 受動形は能動表現にも用いられる。⁶⁾ (b) サダーパリブータはインド語では「常被軽」と「常不軽」の掛詞になっているが、漢訳者は掛詞として訳すことができず、一方で訳さざるをえなかった。⁷⁾ (c) 菩薩の口癖である「軽侮しません」がそのまま菩薩の仇名になった。⁸⁾

(c) については、日本でも「ぼく」「ぼく」という子供を「ぼくちゃん」と呼び、ぶつぶついう男を「ぶつぶつ屋さん」といったりするから、あり得ることのように思われる。多くの解釈が文法をめぐるものであるのに対し、これは文脈にもとづく解釈である。わたしもこの問題の解決には文脈に頼るのが有効であると考えるので、以下、この線に沿って考察を進める。

サダーパリブータの名の由来に関する一連の問答は拙訳の(7)の中の問いから始まる。その回答はどこに示されているか。羅什は(8)に、と考えたようである。だから羅什は菩薩の口癖が菩薩の名の由来になったと考えたのである。

問題箇所(7)の羅什の訳文は(7)の場合は「以何因縁、名常不軽」、(8)の場合は「是比丘・・・而作是言、我深敬汝等」である。前文は問いであるが、後文は必ずしも前文への回答の形になっていない。しかし、羅什が「常不軽」を訳語とした事実は、羅什が後文を前文への回答と見なし、「我深敬(=軽侮しない)」という言葉が命名に関連すると解釈したことを示している。日本の学僧は「而作是言」を「この言を作せばなり」と書き下して、羅什の解釈に一種のお墨つきを与えた。

しかし、回答が示されるのは(8)においてではなく、(12)においてである。「自分自身を軽侮されるものにする」(**paribhūtam ātmānaṃ karoti [yad …]**)

という文がそれである。「する」(karoti)は動詞、「頼みもしない予言をすること」(yad・・・)は主語で、「自己自身」(ātmanam、単数)は目的語、「軽侮されるもの」(paribhūtam)は目的補語である。キーワードともいえるべき「軽侮された」(paribhūta)がここに明示されている。すなわち仇名の由来は菩薩が増上慢比丘によって軽侮されたことにある。回答の提示が先延ばしされ、途中で回答まがいの文が現われたことが、羅什の誤解を招いたといえよう。

そもそも法華經の作者がサダーパリブータをsadā+aparibhūtaの意で用いようとしたら、かれはそれが sadā+paribhūta と紛れることを懸念したに違いない。その懸念が經典に示されていないのは、かれが単純に sadā+paribhūta を念頭に置いていたからだと思われる。

羅什訳の「不輕」(軽侮しない)にもとづけば、常不輕菩薩品はすべての衆生が成仏の可能性をもっていることを主張する章のように見える。提婆達多や女性については提婆達多品ですでにそれがいわれたので、この章では方便品に登場した五千人の増上慢の弟子についてそれをいおうとしているのであると見える。

しかし、章全体の構成を見ると、この章の第一の目的は法華經の偉大さを示すことにあるように見える。そのことはまず(2)で示される。ついでそれがサダーパリブータの物語によって印象づけられる。この物語は二段からなる。まず、(6)～(13)でかれが軽侮された存在であることが徹底して述べられる。ついで、(14)で、かれが法華經を聞いたことが、かれを尊敬される存在に一変させたことが述べられる。すなわち、(6)～(13)は法華經の偉大さを際立たせるための伏線である。(14)以下は伏線をふまえての法華經の功德の宣揚であり、法華經宣布への鼓舞である。この章はそのように読むべきではないだろうか。

一般に、經典はひとりの人の手になるものではない可能性がある。後人のそれぞれの動機からなる手が加わった可能性がある。經典の解釈が一筋縄でゆかないのはそのためであろう。そうした可能性の中であって、常不輕菩薩品の成立は、法華經の功德の宣揚が動機となって始まったと考えてよいのではないだろうか。

以上、「被輕」説に軍配をあげたが、文脈のとりようによっては、「不輕」説を救うことが可能であることを述べよう。

菩薩の名が二重に解釈される可能性への懸念が示されていないことを先にわたしは「被輕」説に有利な材料と見なしたが、視点を変えれば、經典作者は二重に解釈されることをむしろ願ったと想定することが可能である。「被輕」を意味する名を導き出すためなら、軽侮される理由としてありきたりのこと(たとえばボロ服をまとう)を持ち出すこともできたのに、「不輕」を意味するような菩薩の口癖(「あなた方を軽侮しません」)をわざわざ持ち出したことがこの想定を可能にする。しかも「あなた方を軽侮しません」という能動表現で十分だと思われるところに「あなた方は軽侮されません(aparibhūta)」という受動表現をつけ

加え、読者に **aparibhūta** の語を印象づけ、菩薩の名に対する連想へといざなう。

また、(11) (13) で「侮辱する」という動詞として **pari-bhū** を用いず、**pari-bhāṣ** を用いたのは、読者を **sadā+paribhūta** の語義解釈に直行させずに、あくまでも二義性を維持しようとするためであったように見える。(13) では「侮辱されながら」という言葉を記して、語義解釈 **sadā+paribhūta** へさそい、「あなた方を軽侮しません」という言葉を記して、菩薩の口癖を入れた語義解釈 **sadā+aparibhūta** へさそっているように見える。

「不軽」という訳語の文法的難点は、能動・受動の区別を明確にしない漢語にあっては隠れてしまう。したがって口癖を入れたと見る羅什の訳「常不軽」（「軽侮しません男」）は蔑称として十分な効果を発揮し、法華經の文学的価値を高めている。

とはいえ、經典の作者の意図が法華經の功德を宣揚することにあったとすれば、作者の頭にあったのは **sadā+paribhūta**（常に軽侮された男）であったと考えるのが自然であろう。

1. 原文では「四十のガンジス河の砂粒の数に等しい百千億ナユタ」とある。ところが、つづく「ジャンプ洲の微塵の数」や「四洲の微塵の数」に対しても同じ「百千億ナユタ」という数が付されている。ガンジス河、ジャンプ洲、四洲はこの順に大きさが増す。この三処の砂粒の数が等しいというのはおかしい。わたしは經典作者が錯覚を起こしたと推測して、「等しい」を「倍」に改めた。

2. 「最後の」の原文は **sarva-pūrvaka** である。この語は一般に「すべてに先だつ」「最初の」の意にとられているが、松本史朗氏は所有複合語とみて「すべてのものを先行者とする」すなわち「最後の」の意にとることを提案している。文脈からはたしかにそのほうが自然である。松本『法華經』の文学性と時間性『こころ』（在家仏教こころの研究所紀要）第二巻、2007, p. 76（注 20）。

3. 「讃える」は竺法護訳『正法華經』の訳文「虚空唱揚大音、歎斯經典、而告之曰、仁當受經」（大正蔵 9、123a）を参照して補った。

4. 【**paribhūta** 説】 岩波文庫『法華經』下、p. 400 の岩本裕氏の注。中央公論社『法華經』II（大乘仏典 5）、p. 276 の松涛誠簾氏の注。チベット訳 **rtag-tu brñas-pa** は否定辞を含まないから **sadā+paribhūta** の訳語である。

5. 【**aparibhūta** 説】 U.Wogihara and C.Tsuchida: **Saddharmapuṇḍarīka**, p.319 の荻原雲来の注。

6. 【受動形における能動表現】 渡辺照宏『法華經物語』大法輪閣、p. 220。山崎守一「常不軽菩薩 — 名前の由来をめぐって — 」金岡秀友編『大乘菩薩の世界』1988, p. 187f.

7. 【掛詞】 植木雅俊「**sadāparibhūta** に込められた四つの意味」『印仏研』47

—1, 1998, p. 435f.

8. 【口癖が仇名に】 刈谷定彦 『法華経』 常不軽菩薩の考察 — 共生の思想にかかわって — 』 『日本仏教学会年報』 64、1998, p. 263, および注 4.